

鹿児島県人七士の墓

― 歴史を訪ねる旅 (4) ―



下土橋 渡

政府軍の城山総攻撃によって西南の役が
終結したのは、明治一〇年（一八七七年）九
月二十四日のことでした。今年も九月二十四
日がやってきますが、西南の役後、国事犯と
して収監され、獄死した薩摩藩士七人の墓が
宮城県仙台市にあるというのは驚きでした。

そうした史実は学校で教えてくれません
から、著者が知ったのは、恥ずかしながらほ
んの数年前のことでした。旧薩摩藩領内の焼
酎文化の遊びであった『なんこ』のことをイ
ンターネットで調べていると、宮城県仙台市
在住の方のブログに行き着きました（こうい

うのをネットサーフィンといいます）。そのブ
ログに、『鹿児島県人七士の墓』のことが書い
てあったのです。

西南の役に従軍して投降した薩摩軍兵士
たちは、長崎で裁判を受け、約二七〇〇人が
北海道を除く全国の監獄署に配置されました。
仙台の監獄署には、西郷隆盛の叔父・椎原国
幹ら三〇五人が送られ収監されました。うち
十三人が病死。六人は遺族に引き取られます
が、残り七人の墓が仙台市内の瑞鳳寺に残さ
れ、一九七〇年代に七士の墓保存会として、
『みちのく宮城鹿児島人会』が発足し、墓
が整備され、毎年墓参が続けられています。

いつか訪ねてみたいと思っていたので、平
成二十二年（二〇一〇年）三月の、六十歳定
年退職の記念を兼ねた山形・仙台への旅の旅
程にさっそく瑞鳳殿を入れました。仙台藩主
伊達政宗、忠宗、綱宗公の廟所である瑞鳳殿

は、仙台駅で観光周遊バス『るーぷる仙台』に乗って約一〇分後『瑞鳳殿』で下車するとそこが参道入口です。両側に杉木立が並ぶ石造の広く長い急勾配の坂道を登っていきます。もちろん観光ガイドに七人の墓は載っていませんが、瑞鳳殿へのメインストリートである参道沿いにありますからすぐ目に付きます。

仙台に墓がある七士

土岐丑之助	明治十一年没（二十五歳）
長井弥藤太	明治十一年没（四十七歳）
寺田泰介	明治十二年没（三十三歳）
有馬儀定	明治十一年没（二十三歳）
橋口仲二郎	明治十二年没（三十六歳）
米良佐平太	明治十二年没（四十歳）
有馬純俊	明治十一年没（二十五歳）



瑞鳳殿への参道と鹿児島県人七士の墓の案内板



鹿児島県人七士の墓

薩摩藩士は、西南の役だけでなく、戊辰戦争でも宮城と戦いましたから、監獄署も処遇に苦慮したことでしょうが、監獄署長たちは、国事犯を待遇よく、温かく迎えました。西南の役では勝者となりましたが、戊辰戦争では敗者だった東北の人たちは国事犯の気持ちがかかっていたに違いありません。

国事犯たちは、東北の人たちの厚情に報いるため、権原らが中心となって宮城県に対し、不毛の地を開墾して朝恩に報いたいという『開墾奉願書』を提出し、開墾奉仕を願ひ出ます。国事犯たちは、仙台、塩釜、野蒜、雄勝で、開墾作業や築港工事などに従事してよく働き、疲弊していた宮城県の開発に大きな役割を果たしました。

やがて刑期を終え、薩摩兵士たちは故郷鹿児島に帰りました。なかには仙台に残る人などもいましたが、故郷に帰れず病死したもの

もいました。椎原はその人たちの永代供養を瑞鳳寺にお願いしたのです。それが七人の墓です。

一方、西郷ら西南の役に敗れた薩軍二〇二三名もの将兵が眠っている鹿児島市の南洲墓地には、鳥居をくぐったすぐ左手に招魂碑が建ててあつて次のように刻まれています。

招魂碑

明治一〇年西南の役の事に由り宮城県仙台をはじめ全国各地に幽囚中死歿された人が少なくない。本年恰も南洲神社八十五年祭にあたりその記念事業の一つとしてこれら諸氏の招魂碑を同士の英霊眠る南洲墓地境域に建てもつて慰霊の誠を尽さんとするものである

昭和三十七年九月二十四日

南洲神社八十五年祭奉賛会



招魂碑（鹿児島市南洲墓地）

この招魂碑の裏には十二名の名前が記してあつて、うち七名は仙台で、五名は宇都宮で死んだとあります。南洲墓地に建てられているこの碑は、国事犯として収監され、獄中病死した人たちの鹿児島に帰りがたかつたという願いをかなえたものに他なりません。

（元九州職業能力開発大学教授）